

不干齋ハビアン⁽¹⁾の教理解

— 『妙貞問答』と『破提字子』の神観をてがかりとして—

小室尚子

はじめに：本稿の目的

17世紀初頭、『妙貞問答』が執筆された時代、それより先1549年にイエズス会宣教師フランシスコ・デ・シャヴィエル Francisco de Xavier⁽²⁾によって我が国に伝えられたキリスト教は、着々と信徒の数を増やしていた。と言っても、その教理が正確に理解され、浸透していたとは考えられず(イエズス会巡察師アレクサンドロ・ヴァリニャーノ Alexandro Valignano⁽³⁾によって最初の教理書『ドチリイナ・キリシタン』⁽⁴⁾が刊行されたのは1591年のことである。1587年には秀吉により「伴天連追放令」が発せられ、1588年頃から殉教者も出始めている)、信徒達は宣教師から教えられる教理を断片的に受容することでキリスト教を理解していたと推測される。

そのような中で、1605年、日本人イルマン⁽⁵⁾の著作による『妙貞問答』が刊行された。日本人による初の教理問答書であり、神学的内容を持つ護教書というのみならず、その「合理的、批判的精神は、その豊富な思想内容とともに近代日本思想史上の輝かしいモニュメント」また「日本思想史においても最も見るべきものの少ない安土・桃山時代における注目すべき書である」⁽⁶⁾と評されてきた文書である。その論法は、在来の宗教を分析、批判し、その上でキリスト教の宗教としての正当性を論じようとしたものである。教理が深く理解され、研究も進んで来た現代から見れば、論述の不十分さや教理解の曖昧さから、看過されてしまう傾向があるかもしれないが、神道、仏教、儒教、三教によって裏打ちされた当時の日本の思想状況に対して、三教を真っ向から批判し、キリスト教の真理を明示しようとする内容は、それまでの我が国の思想史の上で、類を見ないものという点で、看過はできない著作である。とくに異文化への宣教を、宣教師ではなくその異文化側にいる者が試みるという点から、注目に値する文書であると言える。『妙貞問答』は、1960年代のキリシタン文書発見の過程で、参考とされた文書が発見されたが、そうであっても、日本人が日本人に向けて解説を試みたものとしてはキリシタンの時代には唯一の文書である。

この論文は、そのような意味で評価を得る『妙貞問答』の著者が、その後棄教に至り、次には排耶書を著わしている点に注目するのである。排耶書『破提字子』(1620年刊)は、

不干齋ハビアンの教理解

当時著作された多くの反キリシタン書の中で最初のものであり、内容は浅薄であるが、本質に目を向ける術を知らない他の排耶書に比べれば、キリスト教会内にいた者の論述として一頭地を抜いていると評される。

本稿でこの二書を取り上げる理由は、言うまでもなくこの二書が同一人物の著作によるものの故である。つまり著者は、一方を日本人イルマン不干齋ハビアンとして著作し、その数年後には棄教し、のちに排耶書を著わすに至ったのである。著者がそのような転向に至ったのは何故か。

筆者は、日本におけるキリスト教土着化の問題に関心を持つ者であるが、日本においてキリスト教受容が困難とされる要因は、キリスト教の「神」を理解することの難しさにあるのではないかと考えている。本稿の目的は、日本におけるキリスト教土着化の問題や宣教の課題の視点から、二書の比較分析、とくにハビアンの「神」理解の分析によって、日本におけるキリスト教受容を困難にさせる要因を探ることである。

1 『妙貞問答』における神観

(1) 邦文キリシタン教理書の中の位置

キリシタン南蛮文学は、海老沢有道によれば教理文学、祈祷文学、典礼・秘跡文学、聖書文学、観想文学、護教文学、殉教文学、書簡文学等に分類されるが⁷⁾、本稿では不干齋ハビアンの教理解について論じるゆえに、教理書のみをとりあげることとする。

初めに、諸々のキリシタン教理書が執筆された時間的流れ(1590年代から1600年初頭)の中で、『妙貞問答』がどの位置にあるのかを確認しておく必要がある。何故なら仮にシャビエル渡来以前にキリスト教が伝えられていたとしても、布教を目的として渡来していたとは考え難く、それ故にキリスト教に関する文書が存在したことも考えられない。まさに1549年以降、言葉と文書をもってキリスト教の布教は展開されるのである。日本人の手による教理問答書『妙貞問答』が刊行されたのが1605年とすると、約50年の間に日本人にキリスト教を伝えるためにどのような文書が著わされ、それらがどのように用いられ、また『妙貞問答』に影響を与えているのかを見る必要がある。

時系列的に挙げると、1580年『イルマン心得ノ事』、1581年『日本のカテキズモ』、1591年『天正版国字本 どちらいなきりしたん』、1592年『天正版ローマ字本 ドチリイナ・キリシタン』、1594年『吉利支丹心得書』、1600年『慶長版ローマ字本 ドチリナ・キリシタン』、『慶長版国字本 どちらいなきりしたん』、そして1605年『妙貞問答』の著作の順である。

『イルマン心得の事』は、「エヴォラ屏風文書」⁸⁾の中から『日本のカテキズモ』とともに発見されたもので、ヴァリニャーノが1580年末に豊後臼杵に修鍊院を開設し、そこで

日本人イルマン候補の志願者たちに講じたもののノートである。が、これは断片が残存するのみである。『日本のカテキズモ』は、上述の文書と同じく「エヴォラ屏風文書」の中に見出されたものである。これもヴァリニャーノの講義ノートである。やはり完全な形では残っていない。

国字、ローマ字で著わされ、四回に渡って刊行された『ドチリナ・キリシタン』は、直接には、イエズス会士によって1566年に刊行された児童用 *Doctrina Christam* が、1570年に日本にもたらされ、それに準拠していると思われるが、その元はローマ教会公定のカテキズム *Catechismus Romanus* であるのは間違いないと考えられている⁹⁾。『吉利支丹心得書』は、『ドチリナ・キリシタン』の問答体ではない異本である。現存は1628年に写されたものである。

『妙貞問答』(1605年)は、先にも述べたように、封建領主によるキリシタン排撃の様相が見え始めている中での刊行で、キリシタン時代はこれ以降に教理書の成立は見られず、これが最後の教理書と位置づけられる。しかし、臆することなく伝統的宗教を批判し、キリスト教の真を伝えようとする熱意は他の教理書に引けを取らないものである。

『日本のカテキズモ』が発見されるまでは、『妙貞問答』は、ハビアンの独自の理論展開として高い評価を得ていたが、『日本のカテキズモ』の発見により、『妙貞問答』がその論法に基づいていることが判明し、『妙貞問答』に対する評価は変化した。筆者は、ハビアンが『日本のカテキズモ』に大きく拠りながらも、なお採用しなかった部分に注目する。キリスト教教理についての根幹が教えられているにもかかわらず、『妙貞問答』でハビアンが省いてしまった部分である。そのことについては後ほど述べることとし、先に『妙貞問答』の「神」理解をみていくこととする。

(2) 『妙貞問答』が提示する「神」

『妙貞問答』は、上巻で仏教について論じ、中巻で儒道および神道について論じ、その後下巻においてキリスト教の大綱について論じる形になっている。「論じる」と言っても、著者がそれらについて論述する方法ではなく、問答形式で、キリシタン婦人の幽貞が日本の伝統的思考の中に生きている婦人妙秀尼の疑問に答えながら論じて行く形をとっている。

さて下巻の項目は以下のようである。第一項「貴理志端之教之大綱之事」、第二項「現世安穩、後生善所ノ真ノ主一体在マス事」、第三項「後世ニ生残物ヲハ、アニマラショナルト云フコト」、第四項「後生ノ善所ハ、ハライト云イテ天ニアリ、悪所ハ、インヘルノト云イテ地中ニアル事」、第五項「後生ヲハ何トスレハ扶リ、何トスレハ扶カラヌト云事」、第六項「キリシタンノ教ヘニ付、色々ノ不審ノ事」、以上の六項目をもって解説され

ている⁽¹⁰⁾。本稿では、ハビアンの内転回を見るのに、キリスト教の「神」理解を手がかりとする故に、とくに第二項の「現世安穩、後生善所ノ真ノ主一体在マス事」の項を中心に見ていくこととする。

まず、その中で、「神」がどのように説明されているか要点を取り上げる。

第一項「貴理志端之教之大綱之事」においてハビアンは、キリスト教を理解する上で知べきことを以下の四点にまとめている。「第一ニハ、現世安穩、後生善所ノ主ナル一体ノ真ノ扶手ヲ知り玉フヘキコト。第二ニハ、其扶カルヘキ者ハ何ソト知り玉フヘキ事。第三ニハ、扶ル者ト、扶カラヌ者トノ至リ所ヲ聞玉フヘキ事、第四ニハ、其扶ル道ハ何トシ、何トスレハ、又扶カラヌソト云フ事ヲ心得玉フヘキコト」の四点である。第一に挙げられているのが「現世安穩、後生善所の主である一体のまことの扶け手を知るべきこと」である。

その上で、第二項において「現世安穩、後生善所ノ真ノ主一体在マス事」として、キリスト教の神論を展開するのである。そこでは、「現当二世」の真の主は「キリシタンニ教ヘラル、Ds 御一体ヨリ外ニハナキ」⁽¹¹⁾と言い、このDsとは「天地万像ノ御作者ノコトニテ侍」と言う。Dsは、創造主宰神で唯一の神であるとの表明である。そして、そのDsなる神の計画によって万物は造られたことをさまざまな例を挙げて説明する。造られた人間は、このDsに、「現世安穩、後生善所ノネカイヲハ、皆是ヘ掛奉ル事ニテ侍」と言う。「現世は安らかに、後生は善所に生まれるようにとの願いを、みなこの主にまかせ奉る」ということである。次には、Dsの尊体が何であるのかを訊ねる妙秀に、「スヒリツアルススタンシヤ」（霊的実体）であるという説明が続く。その実体とは、虚しいものと言う意味ではなく、最高善（無量無辺の智恵の源であり量りなき慈悲の根源）、最高義（憲法廉直の主）、全能であると言う意味であると説く。そして第三項で、後世に生き残るものはDsから与えられた靈魂を持つ人間のみであるという説明に展開していくのである。

第二項全編のうちには、創造主なる神と後生についての説明は詳細になされているのであるが、キリスト教の神についての基本的教理である「三位一体の神」の残る二つのペルソナ、「贖い主なる神」、また「聖霊なる神」についての説明はほとんど見られない。つまり「後生善所ノネカイ」を説く前に、創造主なる神に背いて罪に墮ちた人間が、どのように神に赦され、後生善所に行くことができるかを説く必要があるのではなからうか。それがキリスト教教理の核心となる部分なのである。贖い主なる神としてのキリスト、そして人が現世を生き抜くための支えとなる聖霊なる神の説明が必要なのである。ここには「神」を説明する時には、当然なくてはならない贖罪論、聖霊論が見られないのである。

(3) 『日本のカテキズモ』

1960年、ポルトガルのエヴォラ図書館所蔵の古屏風の下張りとなっていた邦文文書の中に、イエズス会巡察師であったアレクサンドロ・ヴァリニャーノが1581年に臼杵修練院で講じた『日本ノカテキズモ』の日本語訳稿の一部が見出された。海老沢によれば、これは「キリシタン教理書として、その内容が知られる最古の文献であり、キリシタン布教の論法・在り方を語るものであるだけでなく、ヨーロッパ的思考、論理を伝えた最初の書であり、東西思想の対決を示すものとして、『妙貞問答』に先んじ、日本における近世的思考を示す最初の文献として、極めて貴重なもの」⁽¹²⁾と言われる文書である。この『日本のカテキズモ』は、元々は「ヨーロッパのイエズス会に、日本における布教の前提として、日本宗教論を踏まえたカテキズモの試みを示そうとした」⁽¹³⁾のものであり、ヴァリニャーノが、天正遣欧使節を引率したメスキタ Diogo de Mesquita⁽¹⁴⁾に托したもので、ラテン語に訳されて1586年にリスボアから上下二巻として刊行されている。

その内容は、上巻で、人間は理性を持つ存在であり、それによって創造主宰の絶対者の実在を認識し、その唯一者が三位一体であり、聖子が人となり、十字架の犠牲をもって人間を原罪から解放し、罪を赦し、永生へいたるという「扶かり」（救済）の道を知ることになると説く。そしてその道について述べる過程の中でヴァリニャーノは、神儒仏的観念と論理を批判、それらが誤謬・矛盾の上に形成されていることを指摘しているのである⁽¹⁵⁾。

エヴォラ屏風から発見されたのは、その日本語訳であるが、発見された部分は、ラテン語本の上巻の半分足らずである。欠落は多いが、残存する部分で語られるところは、人間は動物とは異なり、智徳を持ち、道理が備わり、悟性があること、その悟性に光を持たなければ道を見分けることはできないことを述べる。第一項では、仏の教えの誤りを説き、第二項において、万物の創造神である「神」について説き始める。この「神」は、霊的存在であるが、万物の内にあり、その基をなす。そして御子イエス・キリストが、人間の罪を引き受けるために人となり、十字架に架かる道を扨んでくださった。そしてご自身の死をもってサタンの力を打ち砕いて下さったと説明し、その上で、それを成し遂げられたのは、御子が「神」のペルソナであるゆえであり、全てが「神」の業わざと言えることが説かれている。

このカテキズモは、信徒向けの教理入門書ではなく、イルマン・カテキスタ（教理問答師）・神学生たちのために、日本宗教を批判しつつ論理的に、神学的に、キリスト教教理を解説したものである。ちなみに、1591年より数回にわたりキリシタン教理書『ドチリナ・キリシタン』が翻訳され刊行されているが、『妙貞問答』を著わすにあたっては、ハビアンは『日本のカテキズモ』に拠っていることは間違いないと考えられる。

その理由は、最初の宣教師シャビエルがキリスト教を布教するにあたって、創造主宰神という神観念が存在せずしかも神仏という強力な伝統的宗教が存在する日本におけるカテキズモは、何よりもそれらの論破から始めねばならないと考えていたのが、その後来日した宣教師等に継承されたのである。とくにヴァリニャーノは日本事情をよく理解し、布教方法の分析をよくし、キリシタン教理を展開するための『日本のカテキズモ』をまとめたのである。『妙貞問答』はその発想法や教理解説の順序をほぼ同じくしている。しかしそれは創造主宰神の解説のみに見られることで、『日本のカテキズモ』が説くキリストによる贖罪については、前項でも述べたように『妙貞問答』にはほとんど触れられていないことに注目したい。

敢えて、『妙貞問答』の独自性を評価するならば、キリスト教の神を説明する前段階として、著者が日本の伝統的宗教の中に育った者、とくに仏門に身をおいていた者として、それらの問題点を洞見し、論破することに力を尽くしているところである。これはヴァリニャーノでは力及ばなかったことである。しかしそれはあくまでも核心の部分ではない。

2 『破提字子』における「神」

『破提字子』は、『妙貞問答』を著わしたハビアンが、その2、3年後には棄教し、その後1620年に著作したものである。「提字子」とは「デウス」を漢字で表記したものであり、「破提字子」とはキリスト教の「神」を論破するという意味である。

(1) 「神」の存在の否定とキリストの神性の否定

『破提字子』の論法は、単純に『妙貞問答』で述べたことを、裏返す形で批判するという方法をとっている。批判の論拠はすべて『妙貞問答』の論点におかれている。七段構成で、内五段までがデウスの存在根拠を論破しようとしたものである。

初段では、キリシタンは、天地万象をもって全能の創造主があることを知ることが出来ると言うが、これは珍しいことではなく仏法では成住壊空という移り変わりを持ってこれを論じ、神道も天神七代が天地を開かれた。また「日本は神の国であり、東漸の理によっては仏の国とも言うことができる。それであるから仏神を罵るダイウス(門徒)は、来たるべき世を待つに及ばず。現世であっても仏罰、神罰を蒙る事は、間もない」⁽¹⁶⁾といった論法である。

このような論法によって、デウスの無限性、有智有徳性を批判する。二段では、現世来世二世の主、賞罰の源というが、誰が頼んだのでもないのに無数の人間を造って地獄に墮し、永久に尽きぬ苦しみを重ねさせるのを大慈大悲のデウスと言えようかと攻撃する。三段では、デウスの靈性というのが笑止であること。四段と五段では人間の創造と墮罪につ

いて。甘柿(創世記3章の墮罪物語で語られる「善悪の知識の木の果実」)を食べて正理に背いたとは笑いぐさの第一であること。

六段ではイエス・キリストが救い主だとするならば、人間の墮罪以降、その誕生の遅さはなぜか。「Dsの出世は天地開闢からおよそ五千年に及ぶという……五千年来、衆生をすくうための手段に心を傾けないものを慈悲の主といえようか。これをもって見ても、ダイウスの教えはみな作りごとであるということは明らかである」⁽¹⁷⁾。復活も昇天もみな魔法、幻術であると述べる。

七段では「十戒」についての批判が展開される。とくにその一戒「Ds 御一体ヲ万事ニ越エ大切ニ敬ヒ奉ルベシ」をとりあげて、「初条ニ Ds ノ内証ニ背ク事ナラバ、君父ノ命ニモ随ハザレ、身命ヲモ軽ンゼヨトノ一条ハ、国家ヲ傾ケ奪ヒ仏法王法ヲ泯絶セントノ心、茲ニ籠レル者也」⁽¹⁸⁾と言う。「十戒」の第一戒「万事に越えてDsを大切に敬い奉るべし」を論破して、キリシタンの教えは「Dsの心にそむくことならば、君や父の命令にも随がってはならぬ、身命も軽んぜよとある一条は、国家を傾け奪い、仏法、王法をもみな滅ぼしてしまおうとする意味が、ここに含まれているのである。……Dsの心にそむくことならば、君臣の忠義をすて、孝行、弟愛の縁をもすてよと勧める。このこと以上の悪逆がどこにありえようか」⁽¹⁹⁾となる。ハビアンの中で、創造主宰神への信仰はキリシタン奪国論の根拠へと転じたのである。

3 ハビアンにおける内的転回とその要因

ハビアンにおいて、キリスト教受容から一転して排撃に至る内なる展開はどのようにおこったのであろうか。その点について、残された文献は見出されないので、ここではまず『妙貞問答』が『日本のカテキズモ』から採用しなかった点を分析し、その後『妙貞問答』と『破提字子』の内容との比較をし、ハビアンにおける内的転回の要因を考察していくこととする。

(1) 『妙貞問答』と『日本のカテキズモ』との比較

『日本のカテキズモ』は、先に述べたように破損が多いのではあるが、「神」を解説する部分に、「創造神」と「キリスト」に関しての部分は残されている⁽²⁰⁾。そこでは人間の罪と贖罪のことが解かれているが、『妙貞問答』では、キリストについての説明がほとんど出て来ない。キリストの十字架による贖罪と復活による後生の永生というのはキリスト教の根本教理である故に、『妙貞問答』第五の項目「後生ヲハ何トスレハ扶リ、何トスレハ扶カラヌト云事」という項目においてこそ、それについて十分に説かれるべきところである。しかし全くそれがなされていない。それは、ハビアンの中で、キリストの存在の意味

不干齋ハビアンの教理解

がよく理解されていなかったからではないか。人間の罪の贖いについて理解できていないということは、換言すれば、罪の問題が自分の問題として把握できていなかったということではないだろうか。

キリスト教は啓示宗教である。つまり「神」が歴史上においてただ一度イエス・キリストの存在を通して自らを啓示されたことを信じる宗教である。ということは、イエス・キリストの存在の意味の把握が、「神」理解の基点になるということであろう。なぜキリストの派遣があったのか、それは贖罪のためである。なぜ贖罪か、それは「神」が天地万物の創造主宰神であり、人間の生命の与え手であるゆえになされた救済行為である。ハビアンは、その「創造主宰神」の意味が把握出来ていない。「キリスト教の神」は、キリストの十字架の死と復活によって啓示された「神」の贖罪の事実にある⁽²¹⁾のであって、そこを基点としなければ創造主宰神の説明は明確にはならないし、また「神」が把握されるのは、「神」の啓示であるキリストの存在の把握によるのは言うまでもないことである。しかしハビアンには、キリストに関する理解がほとんど見られず、キリストの存在の意味が把握できていなかったのではないかと考えられる。

(2) 『妙貞問答』と『破提字子』との比較

『妙貞問答』下「現世安穩、後生善所ノ真ノ主一体在マス事」において「Dsハ此天地ヲ下地モナク、御手間モ入玉ハス、『アレ』ト思召ス御一念ヨリ如此ニアラセ玉フハ、真ノ御作者トハ是也。天地ヲ作りアラセ玉フト共ニ、マテリヤビリマト云イテ、万物ノ下地トナルヘキ物ヲモ、其天地ノ間ニ兼備ヘ玉ヘリ。然ヲ、皆知スシテ、仏者モ道者モ、儒道モ神道モ、此マテリヤヒリマト云物、初モナクシテ有、是ガ力ハカリニテ万物ハ出来ルカト心得、或ハ仏性ト号シ、或ハ渾沌ノ一氣トモ云イ、又ハ陰陽トモ名付ケ、其ヨリ外ニ主ヲ立ス。是ガ諸宗ノ迷ヒノ根源ニテ侍」⁽²²⁾と、創世記第一章の天地創造の場面によってデウスを解説し、諸宗の誤りを指摘したのであったが、『破提字子』では、それが以下のように転じる。

「虚霊不昧ノ本源ヨリ陰陽生ジテ、清濁動静ノ氣備リ、天地人共ニ万物ヲ生ジ、我等ガ慮智分別、鳥獸ノ飛鳴走哮、草木ノ開花凋零、皆是二氣ノ転変、清濁動静ニ随フ。古往今來ノ千聖万賢、此理ヲ述ズト云フ事ナシ。孔子ヲ越、老子ニ勝ル提字子ニテアルベカラズ。蔓頭ノ葛藤截断シ去」⁽²³⁾。

また五段において「あまばし一つを食べた科も、Dsに対しておかすと量りない科となるならば、どうしてまたDsに対して罪を悔い悲しみ懺悔する心があって、悔いの八千度までも身を焦し、血の涙に沈む善業も、量りない善根とはならないことがあろうか。おそらくDsは人の悪をそだて、人の善を無視する主なのか、また悪はDsにむすんでは増長

し、善はDsに対しては滅亡してしまうものなのか⁽²⁴⁾。これはハビアン自身が、キリスト教の示す「罪」の意味をまったく理解していないことを露呈している叙述である。

『破提字子』では、キリストの存在に関する不信感や疑問に基づく批判叙述が多く見られる。これは、イルマンであった頃ハビアンの中で蓄積されていたもので、『妙貞問答』では書けなかったものが、『破提字子』で一気に批判材料として吹き出したのではないかと思われる。

さて両書の比較から見えてくることは、ハビアンが「神」を主体的に把握し、信仰の主体性を持っていなかったことである。知識としてとらえた「神」による創造の業については、言葉を駆使して論述できるが、創造主宰神に対する被造物としての自らの「罪」の問題と、「キリストによる贖い」が彼の中で受肉していない故に、キリスト教教理の本質理解に到達できておらず、ついには神道の神々や仏との相違について説明がつかなくなってしまったのではないだろうか。彼の中でキリスト教の教理が確立されていなかったことは明白である。

結び：日本におけるキリスト教受容の様相と課題

『ドチリナ・キリシタン』は、その序文において、キリストより人間に言いおかれた三つの儀を述べている。「一つは信じ奉ること。二つには、頼もしく存じ奉るべき事、三つには、勤め行ふべき事これなり⁽²⁵⁾、つまり信仰と希望と愛である。「信仰」というのは、人智に及ぶ道理の上なる儀、言い換えれば神を信じること。「希望」とは、神を堅く信じて後生に対して希望をもつこと、「愛」は、「大切の善⁽²⁶⁾」にあたる。「愛」を勤め行いなさい、ということである。信仰によって後生と現世の生き方が理解出来ると教えるのである。

キリスト教が伝来して約50年という短い時点で、「神」の説明を試みる教理書を著わした日本人イルマンがこの日本に存在したことに、少なからず感動を覚える筆者であるが、文書を著わしながら、いとも簡単にそれを棄てて、論駁する側に転向できるというのはどういふことであろうか。ハビアンは、知識として「神」を理解していても、それはあくまでも傍観者的理解であって、主体的に全身全霊をもって信じ従うものとして「神」がとらえられていなかったのである。ゆえに「後生」を語っても、それを「神」中心に受け止めることができず、まして信仰に基づいて「大切の善」を勤め行うことが生きる基盤にはなっていないのではないだろうか。であるからハビアンの信仰は、何か支障が起れば簡単に棄てることも出来るし、他に乗り換えることもできるものであったのである。

大内三郎は、日本の近代、キリスト教が再伝した後の日本人における問題であり課題として、「神」把握ができないことを指摘し、その要因の一つとして「キリスト教の倫理的

不干齋ハビアンの教理解

把握が、神把握に優先した」⁽²⁷⁾と述べている。近代日本社会においては、キリスト教倫理に大いに関心が向けられたが、それが「神」の把握を阻む要因となったことを指摘している。近代日本のキリスト教受容の問題はまさにそこにある。キリスト教倫理を知るために「神」についても学ぶのだが、それはあくまでも知識としての理解であって、把握ではないのである。

キリシタンの時代、ハビアンの場合は、「キリスト教の日本宗教的把握が神把握を阻んだ」と言えないだろうか。最初は新しい宗教に対する関心から熱中したが、伝統的宗教からの脱却が明確に出来ていなかったゆえに、無意識の内に、日本的相対主義によって「神」をとらえる伝統的宗教の在り方に呑み込まれてしまったのである。「神」の把握ができないという問題は、日本のキリスト教史を貫いて現代に至るものであり、これを解くことが日本のキリスト教会にとって最大の宣教課題と言える。

注

(1) 不干齋巴鼻庵(Fucan Fabian)

諸々の研究書を総合すると、不干齋ハビアンは、1565年頃、加賀の国の出生で、京都の禪寺で所化となったが、20歳ころにキリシタンとなり、霊名をハビアン Fabian とした。そしておそらく京都南蛮寺にて宣教師等の教導を受け、イエズス会に入会。その後豊後臼杵の修鍊院に入った。1592年の日本耶蘇会目録には京都出身、27歳、学院にあること6年と記されているという。やがて1593年頃、正規のイルマンになった。1605年『妙貞問答』刊行の翌年には、朱子学者として頭角を表していた林道春(後の羅山)が、弟とともに南蛮寺に乗り込み不干氏と論争したことが「排耶蘇」に記されている。ハビアンの棄教は、その後間もなくであったと考えられている。1608年に教会を出奔。理由は一修道女との問題とも言われているが、その後の消息は知れない。約15年後排耶書『破提字子』を発表した(その中でも「ハビアン」という名前を使っているのは興味深い)。1620年のこととされている。

(2) Francisco de Xavier(1506-1552) : 1534年、パリのモンマルトルで、イグナティウス・デ・ロヨラを中心に7人の同志で結成されたイエズス会の宣教師。

(3) Alexandro Valignano(1539-1606) : イエズス会宣教師。日本の初期宣教師史においてシャビエルに次ぐ偉大な聖職者とされる。日本における布教の組織化を計り、日本人司祭の養成に力を尽くした。天正遣欧使節を立案した人物でもある。

(4) *Doctrina Christam* : ポルトガル語で、キリスト教教理書のことである。

これに基づいた邦文の教理書として1591年 天正版国字本『どちりいなきりしたん』、1592年 天正版ローマ字本『ドチリイナ・キリシタン』、1600年 慶長版ローマ字本『ドチリナ・キリシタン』、慶長版『どちりいなきりしたん』が現存するものである。なお、邦文表題については、1591年、1592年のものは「どちりいなきりしたん」「ドチリイナ・キリシタン」となっていたが、1600年には「ドチリナ・キリシタン」「どちりいなきりしたん」と改訂されている。

(5) 「イルマン」はポルトガル語。兄弟、修道士の意。

(6) 「妙貞問答 解説」海老沢有道『南蛮寺興廢記・妙貞問答』東洋文庫14 117頁

(7) 『キリシタン南蛮文学入門』海老沢有道

- (8) エヴォラ図書館とリスボン国立文書館に伝存する破損した古屏風の裏打文書を言う(『日本キリスト教歴史大事典』)。
1960年3月、松田毅一は、ポルトガルのエヴォラ図書館所蔵の古屏風の下張りとなっていた邦文書の採録に成功し、破損の甚だしい文書から、海老沢有道とともに四種類のキリスト教書類を解説した。これらは「エヴォラ屏風文書」と名付けられている。これらはヴァリニャーノの日本での布教方針や日本人司祭養成方針を知る上で貴重な史料となった。
- (9) 『ドチリナ・キリシタン』海老沢有道 『日本キリスト教歴史大事典』950頁
- (10) 本文は、『キリシタン教理書』海老沢有道他編著 教文館1993に拠る。
- (11) 「Ds」はデウス(キリスト教の神)を表す。底本には符号が用いられているが、本稿で引用する井出勝美・海老沢有道校註の『妙貞問答』では「Ds」としているの、それに従う。
- (12) 前掲(10)書 507頁
- (13) 前掲書 505頁
- (14) Diogo de Mesquita(1553頃-1614)：イエズス会士。1577年に長崎に渡来。ヴァリニャーノに任命され天正遣欧使節の後見役として使節に同行した。
- (15) 前掲(10)書 505頁
- (16) 「破提字子」海老沢有道訳『南蛮寺興廃記・妙貞問答』284～285頁
- (17) 前掲書 310頁
- (18) 「破提字子」『日本思想大系25』441頁
- (19) 前掲(16)書 315頁
- (20) おそらく「三位一体の神」の説明がなされていたと考えられるが、『日本のカテキズモ』で残存する中には見出せない。
- (21) 「日本キリスト教思想史上における神把握の問題」大内三郎 5頁
- (22) 前掲(10)書 393頁
- (23) 前掲(18)書 430頁
- (24) 前掲(16)書 307頁
- (25) 『ドチリナ・キリシタン』(慶長版ローマ字本 1600年刊)『キリシタン教理書』海老沢有道他編著 15頁
- (26) 「大切」は、キリシタン用語として「神」を源とする精神的な「愛」をあらわす言葉である。
- (27) 前掲(21)書 3頁
大内は、「神理解」ではなくあえて「神把握」という言葉を使う。「信仰の対象としての神は、それを何と認識するかではなく、いかに把握するか、つまり主体的に全人格を挙げて把握するかの問題で、その辺を自覚的に区別しておいた方がよい……」(1頁)と述べる。

参考文献

<第一次資料>

- 不干齋ハビアン「妙貞問答」『日本思想大系25』岩波書店 1970
不干齋ハビアン「破提字子」『日本思想大系25』岩波書店 1970
不干齋ハビアン「妙貞問答」『キリシタン教理書』海老沢有道他編著 教文館 1993
不干齋ハビアン「妙貞問答」「破提字子」海老沢有道訳『南蛮寺興廃記・妙貞問答』東洋文庫14 平凡社 1964(現代語訳の引用は、この資料に拠る)

<第二次資料>

- 今井淳、小澤富夫編『日本思想論争史』ベリかん社 1979
海老沢有道『キリシタン南蛮文学入門』教文館 1991

不干齋ハビアンの教理解

- 海老沢有道、松田毅一著『エヴォラ屏風文書の研究』ナツメ社 1963
遠藤周作・三浦朱門『キリシタン時代の知識人 背教と殉教』日本経済新聞社 1967
大内三郎「日本キリスト教思想史上における神把握の問題—世界創造の唯一神を中心に—」
『日本思想史研究 第八号』東北大学文学部日本思想史学研究室 1976
坂元正義『日本キリシタンの聖と俗』名著刊行会 1981
积 徹宗『不干齋ハビアン 神も仏も捨てた宗教者』新潮社 2009
チースリク、フーベルト(Cieslik, S. J. Hubert)「キリシタン宗教文学の靈性」『キリシタン教理
書』教文館 1993
松田毅一『南蛮史料の発見 よみがえる信長時代』中公新書51 中央公論社 1969
村岡典嗣「日本倫理思想史上西洋思想との交渉」『日本思想史研究第三』岩波書店 1948

〔金城大学教授・元本学文理学部准教授(日本キリスト教史) 2007～08年度個人研究員〕